

令和7年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川小学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査実施月日 令和7年4月17日(木)

3 対象学年 女川町立女川小学校第6学年児童29名 当日実施児童28名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語、算数、理科
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	宮城県との比較	全国との比較
本校の国語	下回っている (▼)	下回っている (▼)
本校の算数	大きく下回っている (▼)	大きく下回っている (▼)
本校の理科	大きく下回っている (▼)	大きく下回っている (▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・観点別で見ると、「知識・技能」が全体で県平均をやや上回った。特に、「漢字を使って書き直す(このみ＝好み)」の問題は、全国平均を大きく上回った。
- ・短答で答える問題で全国平均をやや上回った。
- ・無解答率が非常に低く、無解答があったのは1名のみ(1問)であった。

(課題)

- ・観点別では「思考・判断・表現」が全体で全国平均を大きく下回った。問題数で見ると、「思考力、判断力、表現力等」に関する全10問中8問が全国平均以下の正答率であった。中でも、「書くこと」に関しては、全国平均を大きく下回っていた。特に、「文章の構成を考える」という問題では、全国平均と大きな差があった。
- ・「読むこと」に関しても全国平均を大きく下回った。特に「文章全体の構成を捉えて要旨を把握する」の問題で、全国平均と大きな差が見られた。

②指導改善のポイント

- ・「知識・技能」における漢字指導については、これまでどおり、反復して取り組むことを継

続させて学びの定着を図る。その中で、同じ漢字・同じ熟語のみを繰り返して書くのではなく、教科書で取り上げられる様々な用例・熟語を取り上げて漢字を書かせることで、児童の語彙を増やすとともに漢字を適切に用いる能力を更に高めていく。

- ・「書くこと」に関しては、自分の考えが伝わるような文章となるよう、文章の構成に気を付けながら書く活動を十分に設定していく。その際、漫然と書かせるのではなく、「順序を明確にする」「伝えたいことの中心を明確にする（内容のまとまりごとに分ける）」「原因と結果を明らかにする」などの方法を具体的に示すことで、児童が主体的・意図的に文章構成を工夫することができるようにする。そのためにも、各学年で配置されている「書くこと」に関する単元において、「何を書くのか」ではなく「どのように書くのか」という目標を教員が確実に押さえた上で指導することができるように十分な教材研究を行う。
- ・「読むこと」に関して、目的に応じて文章と図表などの複数の資料を結び付けながら読むことや、文章全体の構成を捉えながら要旨を把握する読み取りの機会を充実させていく。特に、目的に応じて複数の資料を同時に読むことや、文章を戻ったり進んだりしながら全体を読むことについて児童が十分に慣れていないと考えられる。国語科の授業はもちろんのこと、業前の「読書タイム」や「スキルタイム」を活用しながら、読後に文章の要旨を問う働き掛けを行ったり複数の資料を提示して問題解決に取り組ませたりするなど、読み取りの負荷を高める意図的な場面設定を全校で進めていく。また、今後も児童の読書習慣の更なる定着に向けて、家庭と連携しながら「家読の日」などの取組を続けていく。

③質問紙から

- ・「国語の勉強が好きか」という質問に肯定的な回答をした児童は54％であり、県平均・全国平均をやや下回った。その一方で、「国語の授業の内容はよく分かりますか」という質問には、県平均・全国平均をやや上回る86％の児童が肯定的な回答をした。学力調査の結果と結び付けると、国語の学習について“分かったつもり”になっている児童が一定数いるものと考えられる。普段の授業から子供の学習状況を丁寧に見取り、“分かったつもり”で終わらせないよう個に応じた指導を組織的に続けていく必要がある。
- ・「国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して文章を書いていますか」という質問に肯定的な回答をした児童は約7割で、県平均・全国平均を大きく下回っており、「書くこと」に関する学力調査結果と相関関係にあることが分かる。前述の指導を徹底し、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫したり文章の構成を考えたりすることを自覚的に行っていく児童を増やししながら、「書くこと」に関する能力向上を目指していく。

(2) 算数の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・問題別に見ると、「伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだす」の問題の正答率が、県平均・全国平均をやや上回った。
- ・県平均・全国平均より本校の無解答率が低く、粘り強く解答に取り組んだことが分かる。

(課題)

- ・全ての観点で正答率が県平均・全国平均を下回った。「図形」「測定」「変化と関係」の領域では、

全国平均と大きな差が見られた。

- ・「変化と関係」の領域では、「「10%増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを表す」の問題で、正答率が県平均・全国平均を大きく下回った。
- ・問題別に見ると、「基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述する」、「伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見だし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述する」といった記述式の問題で県平均・全国平均より正答率が極端に低かった。

②指導改善のポイント

- ・算数科は領域ごとに学習内容が緻密に系統立てられている。そのことを教員が改めて自覚するようにし、特に「変化と関係」の領域を中心に、授業者が学習内容について学年間の系統を十分に意識して授業づくりに臨むようにする。
- ・「変化と関係」の領域では、基準量と比較量、割合の関係を正しく捉えるため、問題場面の設定において日常生活の事象を取り入れるなどの工夫をするとともに、言葉や図、式を関連付けながら数量の関係を考察することができるように指導していく。特に、低学年のうちから児童にテープ図や線分図を用いることに慣れさせ、高学年では数直線を用いて立式の根拠や数量の関係を説明することができるように働き掛けていく。
- ・国語科の学習と同様に、言葉や図、式を関連付けながら自分の考えを相手に伝えたり、提示された条件に合わせて問題を処理したりする力を高めていく必要がある。そのためにも、様々な形式の問題に取り組ませることで、指定された形式での解答ができるように思考力・判断力・表現力を高めていきたい。
- ・「図形」の領域の授業で見られる“面積を求める公式を児童が暗記するための指導”のように、問題を処理するためには公式を覚えなさいといけなさいという考え方が教員には根強い。しかし、今回の調査問題で求積の公式があらかじめ提示されていることが示すように、目指したい学力は“公式を覚えること”ではなく“必要に応じて公式を使いこなすこと”だと考える。このことを授業者が十分に認識し、公式を暗記するための指導を公式を使いこなすための指導に転換し、児童が必要な公式を主体的に選びながら問題解決に取り組む学習活動を充実させていく。

③質問紙から

- ・「算数の勉強が好き」という回答はちょうど5割であり、「算数の授業内容はよく分かる」という回答は4割にも満たなかった。いずれも県平均・全国平均を下回っており、特に「よく分かる」に関しては大きく下回っている。指導改善を図っていくことで、児童が「分かった」「できた」と実感できる授業を実現し、児童の算数の学習に対する前向きな意識を高めていきたい。
- ・「算数の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていますか」という質問では、肯定的に回答した児童が5割強であり、県平均・全国平均を大きく下回った。学力の調査結果で自分の考えを説明する力が高まっていないことから分かるように、授業において互いに考えを説明し合う機会を更に充実させていく必要がある。

(3) 理科の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「地球」を柱とする領域において、「結果を基に結論を導いた理由を表現する」の問題と「【結果】

や【問題に対するまとめ】を基に、他の条件での結果を予想して、表現する」の問題で、正答率が県平均・全国平均を上回った。

- ・無解答率が低く、粘り強く解答に取り組む児童が多かった。

(課題)

- ・領域別に見ると、「エネルギー」に関する正答率が県平均・全国平均を大きく下回った。特に、「電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いている」の問題と「直列つなぎに関する知識が身に付いている」の問題で大きな差が見られた。
- ・「生命」を柱とする領域に関しても、正答率が県平均・全国平均を大きく下回った。特に、「実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現する」の問題で差が大きく開いている。

②指導改善のポイント

- ・実験や観察から得た結果を基に考察を深め、まとめを表現する学習活動について、教師主導で進めるのではなく児童に委ねていくようにする。特に、まとめを表現する場面は考察を経て一般化する作業であり、児童自身が行うことで知識の定着や理解の深まりにつながる。どの学年の授業でも、児童が自分で言葉を選びながらまとめを表現することを進めていく。また、A I 型学習教材（キュービナ）を積極的に活用しながら、知識の定着や理解の深まりの度合いを確かめ、必要に応じて補充学習を行うようにする。
- ・条件制御の考え方は5年理科で定着を目指すものである。実験や観察を通して妥当な結果を得るためには条件制御の考え方が欠かせないことを児童が十分に理解し、また経験を伴った理解となるよう、問題に合わせて必要な条件を制御して実験や観察に取り組む学習活動を充実させる。そのためにも、授業において問題設定・予想・実験や観察方法の吟味のプロセスを大事にし、児童が実験や観察を自分の手で行い、主体的に問題解決に取り組むことを目指す。このことは、理科の学習を始める3年時から継続して着実に積み上げていく。

③質問紙から

- ・「理科の勉強が得意ですか」と「理科の勉強は好きですか」という質問に肯定的な回答をした児童はともに9割に近く、いずれも県平均・全国平均をやや上回っており、理科の授業に対して児童が前向きな印象を持っていることが分かった。児童の前向きな印象を持続させながら、指導改善・授業改善に取り組むことで学力向上を目指したい。
- ・「自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりしていますか」という質問に肯定的な回答をした児童は約6割で、県平均・全国平均を下回っている。理科の授業で児童が主体的に問題解決に取り組むことを目指す上で、児童が疑問を持ったり問題を見いだしたりすることが欠かせない。児童と一緒に事象を見つめ、児童が問題を発見する手助けを行う授業者の姿勢を全校で定着させたい。

7 児童質問紙調査結果から（○成果、▲課題）

（1）生活習慣・学習習慣について

- 9割以上の児童が「朝食を食べる」と回答し、85%以上の児童が「毎日同じ時刻に寝る・起きる」と回答するなど、基本的な生活習慣が身に付いていることが分かった。
- 5年生までの授業に関する質問において、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ」、「各教科等で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行った」、「自分にあった考え方、教材、学習時間などになっていた」と肯定的に考えている児童

の割合が県平均・全国平均を上回った。

▲平日に1時間以上家庭学習をする児童は約4割で、県平均・全国平均を下回った。ただし、休日に家庭学習に掛ける時間について「2時間以上」と回答した児童は約3割で、県平均・全国平均を上回った。

▲県平均・全国平均と比べて、家の書籍数について少ないと回答した児童の割合が多くなっている。また、「読書が好きか」の質問について否定的な回答をした児童の割合も県平均・全国平均を上回った。さらに、平日における読書の時間が「1時間以上」と回答した児童はおらず、大半の児童が「30分未満」であった。

▲5年生までの授業で「ICT機器を使用した頻度」について、「ほぼ毎日」と回答した児童が25%にとどまった（県平均は5割強）。また、ICT機器の活用によってできることを問う質問については、いずれにおいても否定的な回答をする児童の割合が県平均・全国平均を上回った。

▲「わからないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている」と回答した児童の割合が、県平均・全国平均を下回った。

（2）規範意識・自己有用感について

○ほぼ全ての児童が「いじめは、どんな理由があってもいけないことである」と理解することができている。

○8割以上の児童が「地域や社会をよくするためにしてみたいことがある」と前向きに回答し、県平均・全国平均を上回った。

▲「自分にはよいところがある」と前向きに考えている児童は7割に満たず、県平均・全国平均より少なかった。「将来の夢や目標を持っているか」の質問でも、肯定的な回答をした児童の割合が県平均・全国平均を下回った。

▲自分と違う意見について考えることに楽しさを感じる児童の割合が7割に満たず、県平均・全国平均を下回った。

8 今後の取組

前述の各教科の指導改善のポイントに加え、女川町教育施策ロードマップの取組の更なる徹底を図る。また、（1）～（3）に挙げる取組についても継続して実施していくことで、教育指導の充実や学習状況の改善を目指す。

（1）授業改善

- ・宮城県教育委員会から示されている「子供の学びを支援する5つの提言～自立した学習者の育成を目指して～」を全校で確実に取り入れることにより、児童の自己有用感を高めたり、基礎学力の定着を図ったりする。
- ・全ての教科等において児童の思考や文脈に合わせた単元の構想・展開を行い、問題解決的な学習を通して児童の学びを生み出すようにする。そのために、授業者は「教材研究を深めること」「ねらい（目標）を明確に捉えること」「発問・助言にこだわること」「適用問題や振り返りの時間を充実すること」を徹底する。
- ・校内研究において教師の指導力の向上を図るとともに、児童の目指す姿の共通理解を図り、教職員が一丸となって学力の向上に取り組む。そのためにも、普段から互いに授業を見合うことを始め、授業づくりについて語り合える職員室の雰囲気醸成していく。

- ・算数科の学習における授業形態（女川スタイル）を日々の指導で実践していく。適用問題に取り組む時間を十分に確保したり、協働的に課題に取り組むことができる授業を展開したりしていくことで、児童一人一人が分かったと実感できるようにしていく。また、児童にとって該当学年の学習内容が年度内に確実に定着化するよう、見通しを持って学習進度を調整し、単元末や年度末に十分に習熟を図る時間を確保できるようにする。
- ・目的や内容に応じて児童がタブレット端末の利用について主体的に判断しながら学びを深めることを目指し、タブレット端末を活用した授業の日常化を図る。
- ・A I 型学習教材（キュビナ）を積極的に活用し、反復的に学習に取り組ませるほか、未定着である内容を選択して問題解決に取り組ませたりするなど、個に応じた学習を充実させる。
- ・中学校教員の乗り入れ授業を実施する教科に限定せず、他教科においてもT・T指導（担任以外の教員がT1を務める授業形態＝教科担任制を含む）を実施するなど、児童の実態に即して様々な指導形態を柔軟に取り入れていく。

（2）学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

①基本的な生活習慣の確立

- ・生活習慣の改善を図るために「うみねこルール」（基本的な生活習慣を身に付けさせるため、児童会で定めた約束事）を全校児童で常時意識させるとともに、情報モラル教室といった外部講師による親子学習会を行うなど、家庭に対しても働き掛けていく。
- ・「スマイルタイム」（健康や生活習慣を確立するために、養護教諭が中心となって指導にあたる時間）を定期的に設け、児童の基本的な生活習慣を一層確立させるとともに、その様子を保健だよりや学校ホームページで発信し、家庭に対しても啓発していく。

②自己有用感の涵養

- ・「キャリアパスポート」を活用し、自分の得意なことや夢について自己認知する機会を設けるとともに、学校行事などにおいて児童の成長を認め、励ますことを通して、児童の自己有用感を高めていく。
- ・女川生活実学（総合的な学習の時間や志教育との関連）の中で職場体験学習や校外学習などを実施し、勤労観や社会性を養う体験活動を充実させる。
- ・高学年では、学校の中心として委員会活動や縦割り活動、各学校行事などにおいて活躍する場を設定し、保護者、教職員、地域の方々から認められ、称賛されるような機会を設ける。

③家庭学習の一層の習慣化

- ・家庭学習の内容は授業と関連付いたものとし、予習的な課題や復習的な課題、活用的な課題など、児童の実態や学習の進捗状況を踏まえたものとする。
- ・家庭学習においても個に応じた取組ができるように、タブレット端末やA I 型学習教材（キュビナ）を活用しながら、関心のある内容や苦手としている内容など、児童が主体的に選択して取り組むことのできる課題を設定する。

（3）女川中学校、女川向学館、地域との連携強化

①中学校との連携

- ・校内研究の主題を共通のものとするすることで、9年間を見通した指導を行う。
- ・小中教科部会を行い、学習状況やその他の情報交換を行うことで各教科の指導における9年間のシラバスを活用し、系統立てて指導する。
- ・中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行っていく。

②女川向学館との連携

- ・主に高学年の算数科で定期的実施する補充的な学習において、女川向学館のスタッフに来校していただき、学習支援を行う。
- ・女川町教育委員会生涯学習係が運営している「おながわ放課後楽校」において、各学年の担任と情報交換を行いながら、補充的な学習を実施し学習支援を行う。
- ・各種検定において、女川向学館の実施協力を得て、検定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③地域人材の活用

- ・女川町教育委員会生涯学習係で作成した「女川小学校版人材バンク」や「出前授業」を活用することにより、地域の教育力を生かして探究的な学びを得られるようにする。
- ・女川町教育委員会生涯学習係との連携を深めて「家読の日」の啓発を行うことで、読書をしたり新聞を読んだりすることを習慣化させ、読解力の向上の一助とする。